

路傍の石仏、墓石に付いて

大 平 安 行

はじめに

神仏の祀られている鎮守の森や、神社、寺院はそこに昔から住んでいる人々の信仰の対象となっており、浜脇の薬師祭りとか住吉さまのお祭りなど、昔から地域の大勢の人々にとって、心がひとつに燃えあがる大切な行事となっています。

しかし、路傍の神仏として総称されるお地藏さん・庚申塔・小さな石の祠などは、人々の日常生活を見守る身近な神仏として、地域の人々の信仰に深くかわっているながら時代の流れのなかに放置され、埋没しているものもかなりあるようです。今回は町内にある十三か所についてご紹介しますが、その前に昔から伝わる民間の信仰について説明します。

の踊りが続けねばならぬとされています。近年盛んになっているが、玖珠町塚脇の地藏講とか「地藏の火とばし」とよばれる臼杵石仏の火祭りがあります。

町内にも多くの地藏が祀られています。

お大師さま

一般には「お大師様」と親しまれているのは真言宗の開祖弘法空海への信仰行事です。弘法大師を信仰する人々が、毎年旧三月と七月の二十日に大師像をまつり、参拝者に菓子や餅・握り飯などを接待します。

県内でも各地に四国八十八か所霊場を模した小規模な霊場が作られ、弘法大師の命日である旧三月二十一日には大師講がひらかれています。

観音様

観音様は種々の願いをかなえてくれる広大な仏として庶民に信仰されています。とくに、安産祈願に霊験があるとされ、広く女性に信仰されてきました。各地に子安観音があって広い信仰圏をもっています。

観音信仰には三十三心化身の考え方があり、ここから三十三観音霊場巡礼の風習が生まれました。県内では毎月

民間信仰

お地藏さま

仏さまのなかで最も庶民に親しまれている地藏が、現世利益・諸願成就の祈祷対象となったのは、中世末から近世初期とされています。「賽の河原の地藏和讃」ができて、地藏をこどもの守り神とするようになってからです。また一方では「延命地藏・子育て地藏」など多種多様な地藏ができました。村境やお寺の境内に立つ地藏も多く、墓地の地藏は六地藏かこどもの墓であるといわれます。

地藏は各種の願い事に霊験があるが、菌痛や頭痛・授乳など特定の病気に効験をもつものも少なくない。また「火伏せ地藏」とよばれる大分市広中の六地藏石幢は、その集落がたとえ三軒に減っても、旧七月廿四日の地藏

十七日の観音の日に、巡拝するための講が組織されていたようです。観音菩薩を信仰しその功德に感謝するために、主として婦人の講でした。

牛馬神

高度成長が始まった三十年前までは、牛馬は農耕や堆肥生産、物資運搬などに欠かせなかったので、飼育には家族同様に気を遣っていました。

馬屋の入口に護符を貼り、神仏の像を掲げて安全を祈願するのが普通でした。

一般には、牛の守護神は大日如来、馬の守護神は馬頭観音とされているが、地域(信仰圏)によって異なり、大日如来(大威徳明王)、大將軍様、馬頭観音などが信仰されています。

祭礼などでいただいたお守りは、小さな竹筒に入れて、紐をつけて牛の首にかけてやったり、木や紙のお札は、馬屋の門口の柱に打ちついたり貼ったりしていました。

作神様

作神様は、田の神、稲作の神、穀霊神をさしています。が、県内で信仰されているのは、社日様・大黒様・稲荷

様・歳神様・荒神様・金比羅様など多様です。

社日とは、土の神の祭りで、春分と秋分に最も近い戊の日で、春の社日が彼岸の前、秋の社日が彼岸の後にくる年は、社日様が稲を見守ってくれる期日が長いので、豊作とする所が多い。

大黒様は、正月十一日から山に出かけて作物を見守り、秋の亥の日に帰ってこられるから、亥の子に餅をつかないと大黒様がなげくとなりました。稲荷信仰の盛んであった地方には、稲束を担いだ神様を祀ってあります。稲荷様は神社のみでなく屋敷神としても勧請されています。

歳神様は、正月に迎えて祀る祖霊様であり作神様である。年の初めにあたって、家運長久と五穀豊穡を祈願します。この近くでは崇福寺の西裏に「歳ノ神社」があります。家ごとに田植の終であるサナボリに、荒神様に三把の稲苗を供えていました。荒神様はかまどの神様であるとともに、作神様として信仰されていました。

金比羅様は、仏教では龍王を意味するから、水神や作神として農民に信仰される素地があり、農山村の小高い山に祀られています。

つの石殿には台座に「極楽寺」と刻まれています。これは、東山小野（枝郷）の極楽寺跡から東庵寺に移しお祀りしたもののようです。

右手三基の五輪塔は「由緒あるお墓」と伝えられています。

(二) 山家一組の 宝篋印塔

石像群に隣接して立派な宝篋印塔があります。文政五年五月の銘があります。昔、家近さん（元塩久旅館）のご先祖が、崇福寺の隠居寺として東庵寺をたてられた時に建立されたものだそうです。記銘については「別府史談」十二号に掲載されています。

(三) 山家三組元永家東側墓地

昔は東庵寺の境内にあった墓地だったと思われます。糸永家の石垣にそって五輪塔・地藏（首欠け）と宝曆四および拾年の年号を刻まれた小さな石碑が二基あります。つづいて大型の石碑が五、六ならび、その間に五輪塔が点在しています。

町内に祀られている路傍の石仏、墓石

(一) 山家一組鉄道踏み切り横の石像群

浜脇一丁目「東温泉」通りから鉄道線路を渡り山家町には入ると、すぐ右山際に、小さな庵と数体の地藏が祀られている。ここは「東庵寺」跡になります。



中央の赤い屋根の内、右側の三体の地藏は東庵寺の境内にあったものです。左側の地藏は右手に独鈷を持ち、左側の地藏は赤子を抱いているように見えます。左側の二体の立像は近所の人が刻んで奉納したものです。二つの石殿に、宝珠と独鈷を持つお大師様らしい石像が安置され、一

(四) 東保家横の地藏

国道に出るトンネル入り口の横の石殿に一体、木造の祠に二体の仏が祀られています。石殿には奉納者浜川兼吉の名前が刻まれています。

(五) 国道ガード入口の地藏

国道から山家町入口北側に地藏の石像があります。これは、東別府「マヤマ」を崩して浜脇の海岸を埋め立てをした時の事故者の冥福を祈って建立したものだといわれます。

(六) 山家七組の墓地

佐藤家の西側の空き地に一群の墓地があります。昭和年代の新しい宝篋印塔と墓石がならぶなかに、数個の五輪塔に混ざって、安永七年戊七月記銘の重厚な墓石が立っています。

この墓地の周辺には、相当数の墓石が点在しているので、永年にわたってかなりの人びとの生活が続いていたことがうかがわれます。

(七) セトの坂登り口の地藏堂

七組を通り抜けて赤野に通じる急坂(セトの坂)がある。その坂の登り口にお地藏さまを祀ったお堂と、そのかたわらに石殿や野仏と古く苔むしたお墓が窮屈そうにならんでいます。ここは町内の道路整備の際に引き取り手のない墓石類を集めて、町内外の人々(一五七名)の浄財でお祀りしたものです。

(八) 赤野十組宮田家裏の地藏群

セト坂をあえぎあえぎ登りつくと、宮田家の白壁を背に石殿に納められた四体の地藏を中にして同じく座像の仏様が左右に祀られている。また二つの日本廻国塔が奉納されています。これは山家の他の地区では見られないものです。多分この近くにあった赤野の庵寺(高野山関係といわれ、大野泰弘氏の先祖が庵主)に関係のあった廻国修業者が奉納したものと思われます。

地藏の土台石に刻まれた「杯状穴」があります。「別府史談五号」の佐藤勉氏の著述によれば、市内でも八幡竈門神社、石垣神社、生目神社などに見られるそうで、

地藏堂には木製で色彩は落ちているが、品のよい感じの天神様と大小の地藏が祀られています。左側の大きな地藏のうち右側の地藏は「赤地藏」といわれます。瓜生島海没の時大野家の庭先に流れ着いたものといわれています。伝説のとおり朱の色が薄く見られます。

中央の大きな二体は地藏様と観音様だと思われます。

お社の中に木造の神殿があり、中に木造彩色の天神様が御幣とともに祀られています。

付近に宝暦九年および明和五年の石仏、文化十二年から天保七年の墓石が見られます。

(十) 県道赤松線路傍の地藏群

赤野から赤松にいたる県道は、江戸時代も府内、日田方面への重要な往還道路でした。赤松部落へいたる道路の斜面などに、いま六十四体の地藏が祀られています。これは昭和四年頃、浜脇の「嘉福」の経営者が、この道路添いに八十八体の地藏をお祀りしたいと地元赤松の人々の了解を求められたので、趣旨に感動した赤松の人々も一家一体の地藏の献納を申し出たそうです。



豊後高田市の安藤信郎氏によれば「その年の月数に合わせて、十二ないし十三の穴を神社の境内にある石造物に穿穴し、油と灯心を入れて火をともし、消えた順から吉と凶の占

いを行なった。と伝えられる。」と記載されています。ここには宝暦九年二月、安永二年から天保七年までの記銘がみられ、セトの坂の石仏とほぼ同時代のものと判明しました。

(九) 赤野地藏と天神様

赤野一組西側山際の杉木立の間に、木造の地藏堂と天神様を祀るブロック造りのお社があり、付近に石殿に祀る地藏や五輪塔が散在している。

(十一) 観音寺石仏群

県道赤松線に登る中間付近に右手に登る小道があり、観音寺の掲示板があります。石仏が左右にならぶように立つ道を稜線まで登ると多くの石造に囲まれるようにして庵寺があります。中腹付近にかけて多種多様な石仏石像が立っていますが、あまり古い年代のものは見られません。

(十二) 赤松地区中央部地藏群

赤松部落の中央部、松音寺に登る坂道のしたの崖などに四十体近くの石仏がある。中には文政九年の記銘のあるものもある。

(十三) 赤松の古塔

松音寺は臨済宗妙心寺派の禅寺でしたが、今は廃寺となっていて久しいと聞いています。開山は「勅諭寶覺真空雪村友梅禅師大和尚」といわれ、寺の裏手の墓地に貞和二年(一三四六)二月と刻まれた開山塔があります。この墓地には弘治三年(一五五七)十一月九日、天正三年



(一五七五) 二月八日入寂の「染雲座元禪師」の無縫塔もあります。これらは別府市指定文化財になっております。他に数個の無縫塔と三十基近くの五輪塔が集められています。

まとめ

・調査場所と固体数

山家町内を主に赤松地区の路傍の石仏・石塔・墓石の概数をまとめてみました。調査終了後にもあちこちに墓石が見つかり、また埋もれかけたもの、破損したものな

ど把握困難なものが多くあり、概数とならざるをえませんでした。

山家町内九ヶ所、赤松地区四ヶ所計十三ヶ所の一九〇基について調査いたしましたが、年号の識別できたものは二十五基(一三パーセント)のみでした。年代から見ると、宝暦から安永のものが、四・七・十一組に見られ、文化から天保のものは、一の五・七・セトの坂・赤野一〇組に多く見られました。

・江戸時代の墓制

墓に刻まれた年号で一番古いのは一七五四年(宝暦四年)のものです。農民が墓を作れるようになるのは元禄(一六八八)以後だといわれます。江戸時代は一般に土葬で、人里離れた場所(野辺)に死骸を埋める埋葬地(埋墓)と、靈魂を供養するためにお寺などに詣墓を立てる両墓制だったといわれます。

山家地区の地形は傾斜地で田畑に利用する土地に乏しく、かりに田畑を開いたとしても用水は浜田川の流れだけだから、農民が住み着いたとしても年貢を負担するよ

うな村落はできなかったと思います。ただ、一の坪は比較的平地なので水さえあれば田地になったと思います。

この田地は浜脇村の小作地になっていたようで、地主が一ノ坪に崇福寺の末寺として東庵寺を建てたので、檀家の人々が詣墓を立てたのではないのでしょうか。

山家の上手に、浜脇から赤野を経て赤松にいたる豊前街道が通っていました。この街道は幹線道路で人の往来も盛んでした。別府村や浜脇村の人々は、お参りしやすい街道の近くに庵や詣墓・地藏や石塔を立てて先祖の供養をしたのではないかと思います。

これ以外の辺鄙なところの墓石は、或いは埋墓の墓標かも知れません。

江戸時代の末期、文化・文政時代(一八〇〇)の前後から、濱脇村や別府村には入湯客が押し掛けて賑やかになりました。木賃宿が立ち並び時には芝居小屋もできました。木賃宿はお客が賄いをするので、野菜や魚がよく売れるようになりました。この頃から山家には赤野や赤松と同じように木賃宿に売るための野菜作りが始まり、多くの人が山家に住んで近郊農業に従事するようになって

て、今の山家の集落ができあがったと思います。

文化・文政期以後に立てられたお墓の中には、山家に住むようになった人々のお墓も多くなったと思います。

また、火葬になると埋墓と詣墓が一つになり単墓制がおこったといわれます。

こんな事情から山家には、鉛玉や貝につめたニッケイやお土産のつけ細工を作る職人も沢山住んで家内工業が盛んでした。

別紙 山家周辺の墓石の年代と当時の社会情勢

引用参考文献

- ・石仏入門 日下部朝一郎
- ・大分の地蔵たち あべとしかず
- ・別府市誌 昭八・三一・四八年度版

山家周辺の墓石の年代と当時の社会情勢

調査地区	墓石に刻まれた年代	将軍	豊後及び各地の状況
4組 セトの坂	宝暦4年	9代 家重	・府内藩、銀札(15匁など6種)を発行 ・4年前僧禪海が青の洞門の開さくを完了
10組	宝暦9年		・ロシア艦隊来航、唐船入港制限
4組	宝暦10年	10代 家治	・銭瓶石騒動(11)赤松農民遠島になる
赤野10組	宝暦14年		・三浦梅園『敢語』を著す ・関東で一揆、20万人参加
	明和5年		・揖斐政俊が日田代官を西国郡代に昇格させる(4) ・農民の生活が困難のため田地の買入が増える
	安永2年		・別府村と浜脇村が松原浜で七島干し場で喧嘩する ・臼杵藩が米・紙の専売をはじめる ・『解体新書』が出版される(3)
7組	安永6年		・田能村竹田、岡藩竹田に生まれる ・冷夏、低温で全国的凶作、疫病流行
	文化8年	11代 家斎	・岡藩、文化の大農民一揆 直入郡、大野郡で蜂起、 全藩域に広がり臼杵藩へ。翌年豊後諸藩に波及する ・全国的に米価高騰する
1組5 赤野10	文化10年 文化12年		・中津藩、藍の栽培を奨励する
セトの坂	文化14年		・府内藩七島庭の販売を大坂鴻池伊助に委託する
赤松 松音庵寺	文政7年		・広瀬淡窓が桂林園を堀田村に移転、咸宜園とする ・イギリス船の出没が多くなる
赤松 中央地蔵群	文政9年		・森藩が鶴見村の明礬生産の直営を計画
赤松 松音庵寺	天保2年		・府内藩、藩札の通用を止め、財政改革に着手する(8) ・諸国干害 ・異国船打払令が出る(8)
赤野10組	天保5年		・臼杵藩の藩政改革始まる(村瀬庄兵衛) ・天保の改革 庶民の娯楽、人形遣い、浄瑠璃禁止する
	天保7年		・福沢諭吉 大坂中津蔵屋敷で生まれる ・「天保郷帳」(江戸時代最後の国勢調査) ・凶作飢饉 大坂で打ち壊し
セトの坂	天保9年	12代 家慶	・天災、凶作のため庶民困窮する ・府内藩領内大洪水
赤野10組	慶應4年	15代 慶喜	・奢侈禁止令 ・清国のアヘン戦争の情報が入る ・別府・浜脇村に木賃宿ができて温泉場が賑わう
			・ええじゃないか騒動が起こる ・大政奉還、王政復古 ・浜の市から鳴川までの海岸道路が開設される

今回調査した墓石の年代にあたる113年間を総括すると

- ・外国船の来航があいつぎ対外的な危機感が感じられるようになった。
 - ・国内は災害が頻発、庶民は凶作や伝染病に苦しんだ。
 - ・各藩の厳しい財政政策や専売、重税により打ちこわしや一揆が頻発した。
 - ・一部の豪商の手になる井手、水利の開発も進んだ。
 - ・庶民の生活は統制されて規制が多く、自由な生活は望めなかった。庶民は心の拠り所をお伊勢参りや四国八十八ヶ所巡礼のような宗教的なやすらぎをもとめていた。
- 経済は行詰まり幕藩体制は崩壊して明治維新にいたる時代に生きた人々であった。